



Title	太宰治文学の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	唐, 雪
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13406号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74479
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Xue_Tang_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 唐 雪

学位論文題名

太宰治文学の研究

・本論文の観点と方法

本論文は太宰治の小説における外国文学・思想の受容とそれに基づく創造の実態と特質を総合的に究明することを目的とする。そのために比較文学の方法を用い、主として習作期におけるマルクス主義との関わり、中期以降におけるキリスト教と聖書の受容、それに中期から後期における幾つかの海外文学の作家・作品との繋がりについて詳述する。太宰文学全般の研究、ならびにその比較文学的研究は、これまでも豊富な蓄積があり、現在も活発に進められているところであるが、かつてのような作家の実人生に密着する実証的な研究から、最近では語り論、精神分析、フェミニズム・ジェンダー批評、ポストコロニアリズム、国民国家論など、多種多様な文学理論を援用した研究が行われている。本論文は比較文学を中心としながらも、自らを現今の太宰文学研究の先端に位置づけるべく、先行研究を批判的に検討し、これらの多彩な観点をできるだけ取り入れることにも注力した。また、太宰文学の比較文学的研究においても、従来の研究は個々の作品における個別の実証研究に偏り、素材となった原典の探索とその継承を問題とする傾向が強く、太宰作品の側の独自性を十分に明らかにしえていない憾みがある。本論文では、影響元としての特定の作家・作品に拘ることなく、英・独・露・中の各国文学とマルクス主義や聖書も広く視野に含め、また習作期から後期に至る太宰の文学全般を対象として、太宰文学における独自の創造に焦点を合わせた総合的な追究を心掛けている。

・本論文の内容

本論文はマルクス主義（習作期）、聖書（中期）、諸外国文芸（中期から後期）の対象に応じた三部構成を採り、作品発表の年代順に従って、比較文学的な観点から太宰文学の生成の過程を検討している。序論では比較文学に基づく本論文の目的と方法について概説した。

第一部では、従来、研究の手薄であった習作期の主要作品を取り上げ、特に三部作と見なしうる未完の長編群を対象として、昭和初年代の太宰とその文学に影響したマルクス主義の意義を検討する。第一章では「無間奈落」を女中小説の観点から論じ、女性嫌悪と女中思慕の矛盾した感情が同居していることを指摘し、そこに大村親子の相克ではなく共犯的関係を看取した。第二章では「地主一代」を、小作争議が頻発した時代風潮と左翼シンパであった太宰の思想的傾向を窺わせるものの、露悪的で自己顕示に著しく傾斜した語り手「私」の心情に終始し、プロレタリア文学的なイデオロギー性とは異なり、後年の太宰文学における自作引用と手記形式の先駆となる作品として再評価した。第三章では「学生群」を、校長追放をめぐる異なる立場に立つ学生たちの青春群像劇として分析し、複数の視点から多彩な学生群を描き分ける複眼的な思考を、小林多喜二『不在地主』や徳永直『太陽のない街』に学んだ創作方法として論じた。

第二部では中期の太宰作品を取り上げ、キリスト教・聖書との深い関わりとともに、書簡体・日記体その他、太宰が得意とした一人称語りの形式の諸相にも着目して追究する。第四章では『風の便り』について、往復書簡の形式を活用し、国策文学としての農民文学と歴史離れた歴史小説に

対する批判、『旧約聖書』の『箴言』の引用、「出エジプト記」のモーセ像への評価に即して論じ、創作の源泉としての聖書への太宰の関心が、新約から旧約へ、イエスからモーセへと顕著に移行したことを読み取っている。第五章では『正義と微笑』を、敬虔なキリスト教徒で早熟多感な少年の俳優願望と、その願望の結実の過程を日記体で描いた小説として分析する。特に『旧約聖書』の『申命記』の解釈、イエスとモーセの人物像の比較論に、聖書への理解を深めようとした太宰の志向性を見て取った。第六章は『パンドラの匣』について、作品の成立事情を整理し、新聞連載と書簡形式との相乗効果を論じ、「葉桜と魔笛」「満願」「斜陽」など太宰の結核小説の特質と系譜を分析し、教養小説として本作を位置づけ、さらに玉音放送、英語の優位性、婦人参政権、自由思想などの時事問題と戦後表象を逐一考察し、最後に自由思想とキリスト（教）との関係を複数の歴史的事実に基づいて論じた。第七章では「トカントン」を脱線小説として論じ、太宰文学の脱線的特質と系譜を概説するとともに、虚無主義の克服に資するキリスト教への帰依、もしくは聖書の読解の勧めという受信者「某作家」の返信が発信者にどう受け止められたか不明のまま、一種宙づり状態に置かれたため十分に機能しなかったと論じた。

第三部では、中期から後期の太宰文学における海外文学の受容を検討する。第八章では「新ハムレット」について、太宰は『ハムレット』に代表されるシェイクスピア文学のナンセンス的性格を十分に読み取り、自身のナンセンス文学への志向と結び付けて、ハムレットをはじめとする人物群が織りなす錯綜した物語を作り出し、『新ハムレット』を悲劇ならざる喜劇に仕上げたと論じた。第九章では、太平洋戦争の最中に構想・執筆した『お伽草紙』所収の四つのお話「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」、および除外された「桃太郎」を逐一分析した。ジッド、ドストエフスキーから学んだメタフィクションの手法を取り入れた本作は、原典となった『御伽草子』や絵本に満ち溢れた教訓臭を排し、全編を貫く荒唐無稽な人物・動物の関係設定とユーモラスな語り口を付与された類まれな水準の滑稽文学として創造され、同時に現代人の心理を深く抉り出す点において優れた心理小説とも言えるとした。第十章では、発表当初から長きに亘って、顕著な皇国賛美、時流迎合の作品と見なされ、国策小説として論じられてきた『惜別』の研究史を整理した上で、先行研究ではほとんど注目されてこなかった作中におけるキリスト教と聖書「出エジプト記」の役割、およびそれがどのように魯迅の文学観・民衆観・革命思想と結びついていたかを論じた。『惜別』は小田獄夫、竹内好など同時代の魯迅研究者による伝記に基づきながらも、それらとは全く異なった太宰の独特な魯迅理解に基づく魯迅像を描き出したものとして再評価した。第十一章では、『斜陽』の成立過程におけるアントン・チェーホフの『桜の園』と太田静子の『斜陽日記』の役割を検証し、『斜陽』独自の創作手法と文体的特徴について論じた。太宰は『桜の園』に描かれた没落貴族の生態に心を惹かれ、敗戦後の農地改革による生家津島家の没落と重ねて、象徴性に富む優雅で感傷的な『斜陽』の世界と、その世界に生きる人間を描き出した。また、手記形式の体裁を採った『斜陽』を、単純素朴な『斜陽日記』とは異なり、単線的な物語を展開せず、手紙・日記などを作中に交えながら、空想・追憶・夢など、書き手・かず子の深層心理を意識の流れの手法で鮮烈に掘り下げた作品として評価している。

結論では、ゲーテが晩年に提起した「世界文学」の概念を援用し、太宰文学は日本文学の伝統に深く根差すとともに、特殊の時代が生み出した異端児でもあり、人間心理の深淵を凝視する普遍性に富む点において一種の「世界文学」であると定式化した。さらに今後の課題として、特に天才論などに着目して、太宰とドイツロマン派との関係を中心に研究を進める展望が提示されている。